

インターンシップを通して キャリアパスを拓く

高山 美里 さん

大阪大学大学院 理学研究科生物科学専攻 博士後期課程 1年

インターンシップ概要

実施期間：2018年8月22日～10月19日(約2ヵ月間)

受入企業：株式会社リコー

実施テーマ：遺伝子検査における1分子検出能向上に関する研究

——インターンシップに行こうと思ったきっかけは何ですか？

私は、インターンシップに行く前から、企業への就職を考えていました。というのも、企業のことを考えながら過ごしていないと流れて研究室に残るような感じになってしまって、就職活動をするタイミングもつかめないまま終わってしまうような気がして。だから、常にアンテナを張っていないと企業に行くという選択肢はなくなってしまうので、なるべく企業というのを意識しながら過ごすようにしていました。そういうなかで、インターンシップも行ってみようかなと思いました。

——それはいつ頃から考え始めていましたか？

博士後期課程に進むことは学部生のときから考えていて、その頃はアカデミアに行くものだと思っていました。博士学位をとると企業には行けないってみんな言っていたので。でも、修士で研究室に入ってから、アカデミアの道も厳しそうだと思ったので、企業就職を考え始めました。いろいろと調べたり、話を聞いたりするなかで、博士であっても企業に行くのは無理ではないと思えてきて。自分に合う企業を見つけられるかどうかの問題かな、と。だから、自分がどこに合うのか探さないといけない、と思いました。

私がインターンシップに行ったのは、理学研究科の特別コースの一環だったんですけど、そのコースに出願したのがM1の冬だったので、その頃には企業のことを考えていました。それから、いつインターンシップに行こうか、と考えたときに、M2は結構忙しかったのと、Dの方が自由な時間が多いということがあって、行くならD1の早めの時期かな、と。修士論文を出し終わってすぐに大学のキャリアセンターに相談に行きました。

経験を自信につなげる

——インターンシップ先ではどのようにして選びましたか？バイオ系の学生さんと製薬会社を選ばれるイメージがありますが。

私は、製薬会社でのインターンシップはあまり考えていなかったんです。同期とか先輩とか、周りで製薬系に行っている人がたくさんいて、話を聞くことができたので。だから、せっかくのインターンシップだし、もっと知らないところに行った方が、意味があるように感じたので、バイオのテーマで募集していた製薬以外の企業を調べました。

今回のインターンシップを終えて、他業種であっても、バイオ系に事業を展開しているような企業にも、自分が活躍できる機会があるなど感じて、興味をもつようになりました。

——インターンシップ先ではどのように研究を進めていかれましたか？

指示されながら進めるというより、メンターの方と一緒に進めるという形でした。後半はとくに、自由にやってほしいといわれていて、私が自分で考えて「こういう実験をした方がいい」というようなことを提案していくような形で、実際に最初にたてられていた計画とは違うことをしました。メンターの方と、毎日ディスカッションしながら取り組んでいましたので、毎週のミーティングでも意見を出しやすく、「議論のきっかけになることが多くて良かった」と言ってもらうことができました。

——インターンシップを通して、どのような気づきがありましたか？

研究や実験の進め方に関しては、企業と大学とで、そこまで大きな違いはないと感じましたが、ただ、時間に関する感覚に違いがありました。企業では、いつまでに結果を出さなくてはいけない、ということが明確にあって、大学だと、時間をかけすぎてもあるんですけど。でも、時間をかければかけるほど良い結果が出るというものでもない。そういう意味で、時間の使い方について、とても勉強になりました。

それから、色々なキャリアを持った方のお話を聞ける機会も多かったと、今後のことを考えていくうえでとても参考になりました。

——まだインターンシップに行っていない学生に向けたアドバイスやメッセージをお願いします。

少しでも企業に興味があって、博士後期課程にすすむのであれば、なおさら、早いうちから企業のことを考えて、自分の研究のことも考えながら、適切な時期にインターンシップに行くという選択が割といいのではないかと私は思いますね。アカデミア志望の人でも、企業にちょっと行ってみるのもいいと思います。大学と企業の共同研究といったこともあるでしょうし、どういう風に企業で研究がすすめられているのかを見ておくのはいいことだと思います。

企業の視点

双方にとって学びの多いインターンシップを

——インターンシップをすすめていくにあたり苦労された点がありますか？

今回のインターンシップでは、博士課程の学生さんが来られるということで、自由度の高いスケジュールを組むようにしました。前半は、企業の研究に慣れてもらうために、成果がきちんと出るような課題を設定して、それをふまえた上で後半の課題を設定することを考えていました。ところが、成果を必ず出す目的で設定していた前半の実験がうまくいかなかったんです。予想外のトラブルがいくつかあって、すぐには解決できなさそうだということで、中斷することになりまして、そこに至るまでかなり苦労しました。

協働して課題を乗り越える

——インターンシップ前半でトラブルがあったということでしたが、後半はどのように進められたのですか？

前半のトラブルのなかで、当初想定していたものとは別の方向で研究を進められそうであることがわかったので、新しくそこからテーマを提案してもらいました。前半の実験があってこそそのアイデアだったので、それに関しては良かったと思っています。ディスカッションをかなり密にとっておりまして、そのなかでかなり多くのアイデアが生まれました。前半の部分でも、彼女の方から色々な提案をいただいていたので、それで改善できた部分もありました。彼女の積極的な姿勢が、大きな助けになりました。

——研究インターンシップを実施するメリットはどのようなところになりましたか？

私自身、指導をするということが入社後はじめてのことだったので、人を指導するという点について学ばせていただきました。また、一緒にデータを見て議論していくなかで、かなり成長させてもらいました。チーム内で止まっていたテーマについて実施したんですが、インターンシップを通じて解決にもっていくことができたと思っています。

——今後、インターンシップの受け入れを継続していくにあたり、どのような学生に来てほしいですか？

積極的な方ですね。研究所ですから、言われたことをやるだけ、では研究にはなりませんので、自分でインターンシップをアレンジしていくような力のある人に来ていただけたら、我々としても刺激になります。学生さん本人のためにもなると思います。今回、高山さんに関しては、情報収集能力が非常に高く驚きました。私個人の感想なんですけど、D1で来られるということは、修士卒で



大崎 優介 様

株式会社リコー リコー未来技術研究所
ヘルスケア研究センターバイオメディカル研究室
バイオデバイスグループ

入社した人と同じような感じかな、という印象をはじめ持っていたんです。でも、実際に受け入れてみたら、違うな、と。情報収集能力が高いということと、考え抜く力がしっかりしているという印象を受けました。

——博士課程の学生をインターンシップで受け入れることについてはどうにお考えですか？

我々としては、学生さんには、成果というものをどうしても持ち帰ってほしいと考えておりまして、そこに責任を感じています。修士の学生さんを受け入れる場合、スケジュールをきっちり立てて、この通りにやってください、というような進め方でやってきたので、今回のような自由度の高いやり方はある意味チャレンジングな感じでした。我々としても、止まっていたテーマを進めてもらうということで、うまく相乗効果がうまれて最終的には結果を出すことができましたと思います。今後もそういったテーマで学生を受け入れていければと思います。

株式会社リコー リコー未来技術研究所ヘルスケア研究センター
バイオメディカル研究室 室長 瀬尾 学 様

インターンシップの実施によって、優秀な人材を発掘することに加えて、フレッシュな視線で我々の取り組みを見てもらうことや、インターンシップ生を指導することを通じて、中堅から若手のメンバーに気づきを与える機会をつくるのが可能になると考えています。また、今回のインターンシップでは、これらに加えて、重要性は高いものの緊急性が低く、なかなか取り組めなかった課題・アイデアなどに取り組む機会を得ることができ、非常に有益なものとなりました。

教員の視点

大阪大学大学院生命機能研究科
教授 上田昌宏 先生

日本の大学の研究室では、大学院生が構成メンバーの中心となつていることが多く、学生が長期間のインターンシップに参加することに対して難色を示される先生もいらっしゃると思います。私の研究室は大阪大学と理化学研究所のふたつあるのですが、ポスドクも多く、研究員さんに支えてもらっているような形なので、今回のような機会に対して、学生を送り出しやすかったと思います。

こうした研究室としての体制と、それから私自身の考え方として、学生には自由にやりたいことをやってもらうということがありまして、今回、高山さんから相談を受けたときに、みんなとん挑戦したらいいと伝えました。研究において、自分を成長させることができるのは自分しかいないと学生には感じてほしいと思っています。自分に必要なものは本人が一番わかっていると思いますし、今回のインターンシップで高山さんも多くの学びを得られたのではないのでしょうか。企業と大学が交流できるような仕組みが、もっと増えていくといいと思います。

